

赤いガラスの宮殿

小川未明

青空文庫

ひとりもの平三は、正直な人間でありましたが、働きがなく、それに、いたつて無欲でありましたから、世間の人々からは、あほうものに見られていました。

「あれは、あほうだ。」と、いわれると、それをうち消すものがないかぎり、いつしか、そのものは、まったくあほうものにされてしまえばかりでなく、当人も、自分で自分をあほうと思ひこんでしまうようになるものです。平三も、その一人でありました。

夏のはじめのころであります。

往來を歩いていると、日ごろ、顔を知っている、村に住む若夫婦が旅したくをしてきかかるのに出あいました。男は、なにか大きな荷を背負っています。後から、やさしい若い女房が、手ぬぐいを頭にかぶつて、わらじをはいてついてきました。

「どこへいくんだな。」と、平三は、びつくりした顔をしてたずねました。

「旅へ出かけるだよ。この村にいたつていいことはない。旅へいってうんと働いてくるだ。平さんも、いかないか。」

「いつ、この村へ帰るだ。」

「それは、わからない。」

「旅^{たび}つて、どこだな。そこへさえいけばどんないいことがあるけい。」

「それは、広^{ひろ}いだ。どこつて、おちつく先^{さき}は、わからないが、たんといいことがあると聞^きいているから出^でかけるだよ。」

「その広^{ひろ}い土地^{とち}を掘^ほつたら、金^{きん}か、銀^{ぎん}でも出^でてくるか……。そんなら、おれもいつて、精^{せい}を出^だして掘^ほるべい。」

「金^{きん}も、銀^{ぎん}も、なんでも出^でてくるだ。おれたちがいつて、よかつたら、たよりをするだよ。そうしたら、おまえも、出^でかけてきべい。そんだら、達^{たつ}者^{しゃ}で暮^くらしなよ。」

「そんだら、二人^{ふたり}も、道^{どう}中^{ちゆう}氣^きをつけていきなよ。」

平三^{へいぞう}は、いつまでも道^{みち}の上^{うえ}に立^たつて、二人^{ふたり}の姿^{すがた}の消^きえてゆくのを見送^{みおく}っていました。

それから、日^ひがたちました。

彼^{かれ}は、村^{むら}はずれの丘^{おか}のふもとで、ひなたぼっこをして、ぼんやりと空^{くう}想^{そう}にふけつていました。おりおり思^{おも}い出^だしたように、初夏^{しよか}の風^{かぜ}が、ため息^{いき}をつくように吹^ふいて、彼^{かれ}のほおをなでて過^すぎました。

そのとき、三十五、六^{おんな}の女^なが、頭^{とう}髪^{はつ}を乱^{みだ}して、ぶつぶつとつぶやきながら、せわしうな足^{あし}どりで、なにかざるにいれて、小^こわきに抱^{かか}えながら、平三^{へいぞう}の前^{まえ}を通^{とお}り過^すぎようと

しました。

平三の腰を下ろしているうしろには、こんもりとした野ばらのやぶがあつて、真つ白な花のさかりでした。それには、無数のみつばちが集まっています。しかし、そんなことには、ここを通りかかる女も、また平三すらも気づいていないようすでした。

彼は足音を聞いて、ふと顔を上げると、やはり見知りの村の女でしたから、

「こんにちは、どこへいかつしやる……。」と、声をかけました。女は、びっくりして、こちらを向きました。その目の中は涙にぬれていたのです。

「かわいい、大事な坊やが死んでしまつて、おもちやがあると思ひ出していけないから、みんな河に流してしまおうと思つて、捨てにいくところだよ。」

「ほんとうに、かわいそうなことをしたな。おれに、よく悪口をいったり、石を投げたり、からかったが、あの子は、かわいい、いい子だった。おれ、ちつとも憎いと思つたことがなかつたよ。」

「ほんに、おまえさんに、よくいたずらしたつけが、後生だから、悪く思つて、くんなさんなよ。ちつとも悪気はなかつたのだから……。」と、母親は、思ひ出して新しく出る涙をぬぐいました。

「おれ、坊やのおもちやもらつておくだ。坊やのと思つて、大事にするだ。おくんなせい。」

「そんだら、河さ流さんで、おまえさんにくれべいかな。」

母親は、子供のおもちやを平三に与えたのでありました。

彼は、それを自分の小屋へ持つて帰つた。それらのおもちやは、びつこの女の子のお人

形や、セルロイド製のサンタクロースに似たおじいさんや、馬や、こわれかかった汽

車や、そのほか絵本などでありました。平三は、壁のきわにそれをならべて、死んだ子

供の顔を思い出していたのであります。

村の子供たちは、平三の留守の間に、小屋の中へ入つてきました。そして、彼が大事

にしているおもちやを外へ持ち出して、いつのまにか、どこへかなくしてしまったのもあ

りました。

「また、いたずら子が、留守にはいつて、大事にしているおもちやをどこかへ持ち出して

しまったな。」と、帰つてきた平三は、ひとりでどなり声を出して、家の外へ出て、ど

こかに落ちていないかとおもちやをさがしました。

もはや、夕闇は、路の上にせまつてきて、あたりのものが、はつきりとわかりません。

彼は悲しくなつて、おもちゃを持っていた、死んだ坊やにすまないことをしたような気がして、涙ぐみましたが、また考えてみると、同じような子供が、どこかへ持つていつて遊んだのなら、けつして、罪にもならないと思つたりしたのです。

木の葉の落ちる秋となり、そして、やがて冬がきました。

雪は、ちらちらと降りはじめました。田や畠に、餌がなくなると、からすは、ひもじいとみえて、カアカア鳴いて、人家のある方へ飛んできました。

「こんな雪の日には、困るのは、だれも同じこつた。そら、おまえにもくれてやろう。」と、平三は自分の食物をわけて、からすに投げてやりました。

からすという鳥は、黒い陰気な鳥で、人間にはきらわれますが、なかなかりこうな鳥でした。さかしそんな目つきをして、木の枝にとまって、平三の方を見ましたが、じきに飛んできて、それを食べました。それから後は、いつでも平三の小屋の近くにいて、遠くへいつても、また、このあたりの木に帰つてきました。

雪のないうちは、手助けにやとわれたりして、どうにか暮らしてゆきましたが、雪が降つてからは、外の仕事もなくなつてしまい、平三をやとうようなものもなかったのです。「平三は、どうしたろうな。」

「せんだつて、往來おうらいを通とおつていたら、からすが屋根やねにとまって、アホウ、アホウと鳴ないていたぞ。」と、戯談じやうだんをいっただけのがあります。

「無欲むよくな、正直しやうじきな人間にんげんだ。そんな悪口わるくちをいうもんでねえ。雪ゆきが降ふつて、仕事しごとがなくなつて困こまつているだろうから、私は、明日あすにも、ちよつといつてのぞいてみるつもりだ。みんなも、なにかよいなものがあつたら、くれてやるがいいだ。」と、老人ろうじんが、口くちをいれました。

こんな、かげで、村むらの人ひとから同情どうじやうされていとも知らずに、平三へいぞうは小屋こやの中なかで、一人ひとりで雪ゆきぐつをつくつていました。

「カア、カア。」と、からすが、外そとのかきの枝えだにとまって、しきりに鳴ないています。

「なにかくれてやりたいが、今夜こんやは、一つひとつぶの飯めしもねえだ。我慢がまんをしるよ。このくつを持つもつて、明日あすは、早くはや売うりにいつてくる。そして、帰かえりに食たべるものを買かつてくるからな。」と、小屋こやの中なかで、聞きこえるはずもないのに、からすにはなしをしていました。

ちようど、そのころのことです。ほどへだたつた町まちの酒屋さかやに、嫁入よめいりがありました。その評判ひやうばんは、この村むらでもたいしたものでありました。

「三国ごく一の嫁御よめごというこつた。あんな器量きりやうよしは、まあ、金かねのわらじをはいて、さがし

ても、ほかには二人とないという話だ。」

こんなうわさは、端から、端にまでひろまりました。平三はそれを聞くと、

「どんな、嫁御だろうな。」といつて、ぼんやりと考えこんだのです。

村で、町へいつて、その嫁御を見てきたものは、帰ると、その美しいことを、ほこり顔に語ったのでありました。平三は自分も、どうかして、その嫁御を見たいと思いました。

しかし、そんな手づるはどこにもありません。考えたすえに、彼は酒を買いにいったら、あるいは見えまいものでもないと思つたのでした。

あわれな平三は、夜の目も眠らずに、わらをあんで、雪ぐつをつくりました。そして、翌日は、それを持つて、村から村へ、売つて歩きました。

晩方、家に帰ると、小さな徳利をさげて、町の酒屋へ酒を買いに出かけたのです。

彼は、毎日毎日、晩方になると、徳利をさげて、酒を買いにゆきました。しかし、

三国一の花嫁は、家の奥深くはいつているとみえて、一度も、その顔を見ることができなかつた。いつも、頭のはげあがつた番頭が、上目を使つて、じろりと平三の顔をにらむように見て、一合ますに酒をはかつていれて渡しました。彼は、毎日毎日失望して、家へ歸つてきたのであります。

「あほうの平三は、いつから、あんなに飲み助になりおったか。」といって、村の人たちは、彼が、ちらちらと雪の降る中を町の方へ徳利をさげてゆく、さびしそうな姿を見送ったのでした。

平三は、あまり、酒が好きでなかったから、飲み残しを、大きな徳利にうつしておきました。そして、だんだんそれがたまって、酒は大きな徳利いっぱいになろうとしました。ある日、彼は、今日こそ美しい嫁御を見たいものだと思つて、酒を買いにゆきましたが、やはり見られなかったばかりでなく、番頭から、冷淡にされて、悲しんで家へ帰ると、徳利の酒を茶わんにうつして、かなしみを忘れようとして飲みほしました。いつになく、量をすぎて酔つてしまうと、彼はごろりと横になつて、眠つてしまったのです。

この村にいても、おもしろくないので、平三もいよいよ旅へ出かけたのでした。こわれかかったような、小さな汽車に乗つて、野原の中を走っています。石くれがごろごろとして、短い草が風になびき、向こうの方には、さびしい丘がつづいていました。そのさきは、海になつていゝらしく、しろい雲が、ちぎれて飛んでいます。

ピヨと、汽笛が高くひびいて、汽車がとまると、彼はおりなければならなかった。

「ここは、どこだろう……。」

彼は、足の向くままに歩いてゆくと、

「どこへいくんだい。」と、ふいに声をかけた子供があつた。ふり向くと、あの死んだ坊やでありました。

「おお、坊や。おまえは、こんなところにきているのか、母さんが、泣いていたぞ。そして、おまえは、死んだのではなかったのか。」

「まだ、たくさんあちらにいるよ。つれていつてやろう。」

子供は、先にたつて、平三を丘の上へ案内しました。いつしか、子供の姿は見えなくなつて、彼は、赤いガラスでつくられた宮殿の前に立っていました。頭のとがった三角形の赤いガラスの建物は傾斜した丘の上にあつて、かたむいていました。そして、この建物には、ふしぎに入り口がついていませんでした。赤いガラスをとおして、内部をのぞくと、いくつか、影が動いています。じつと見るとおじいさんが、腰かけていました。また、いつか、旅へ出かけた若もの夫婦がいました。女房は、にこにこして、なにか盆にのせて、あちらへ運んでいました。こちらには、びつこの娘が、さびしうにして立っている。そればかりでない、犬も、子馬も、みんないっしょにむつまじく暮らしていました。おじいさんは、なにかいつているとみえて、口だけは動いていたが、ガ

ラスの内部ないぶでいつているので、声こえがすこしも聞きこえてきませんでした。平三へいぞうは、なんだから、そのおじいさんも、娘むすめも、みんなどこかで、一度ひと見たことのあるような気がして、考かんがえていました。が、それらは、すべて、自分じぶんの持もつていたおもちゃであつたことに気きがつかなくなつたのです。

「もし、もし、おれも、仲間なかまにいられてくんなされ。もし、もし。」と、平三へいぞうは、叫さけんだけれど、あらしが強つよくて、その声こえを吹き消けしたのでした。

青々あおあおとすみわたつた空そらの下で、すさまじいあらしが、吹ふいていました。たちまち、どつと、おそつて、この赤いガラスの宮殿きゆうでんにぶつつかつたかと思おもうと、さながら氷こおりをくだいたようなひびきをたて、みごとな建物たてものは、さんらんとして、空くう中ちゆうに、飛とび散ちつてしまいました。

夢ゆめからさめた平三へいぞうは、ぼんやりとして、外そとをながめました。めずらしく、よく空そらは晴はれて、夕焼ゆうやけが赤々あかあかと雪ゆきの平野へいやをそめていました。そして、なにかいいことのある知しるせのように、からすが鳴ないていました。

「こんどこそ、魂たましいをいれかえて働はたらくだ。」

彼かれは、生うまれ変かわつたように、さとりました。たまたま遠とい、浜はまの方ほうへ帰かえつてゆく、か

らのそりがありました。浜^{はま}へゆけば、冬^{ふゆ}でも仕事^{しごと}があると聞いていました。彼^{かれ}は大きな徳^{とく}利^{くり}の酒^{さけ}を男^{おとこ}にやつて、浜^{はま}の方^{ほう}まで、そのそりに乗^のせてもらうことにしました。彼^{かれ}は、永^{えいき}久^{きう}に、その村^{むら}から去^さつたのです。からすだけが、彼^{かれ}との別^{わか}れを惜^おしんで鳴^ないていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷発行

底本の親本：「未明童話集4」丸善

1930（昭和5）年7月

初出：「赤い鳥」

1929（昭和4）年1月

※表題は底本では、「赤《あか》いガラスの宮殿《きゆうでん》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：七草

2015年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

赤いガラスの宮殿

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>